

公益財団法人図書館振興財団
第19回 子どもの本 この1年を振り返って 2018年 講演録
■絵本の部■

一般社団法人 日本子どもの本研究会 絵本研究部 米田 久美江

感性を刺激する絵本たち

地球環境の悪化、特にプラスチックによる海洋汚染の深刻さが際立ち、人権侵害への告発も高まりをみせ、多様な生き方や少数派を尊重する動きが顕著であった。

このような流れのなかで2018年も多彩な絵本が出版された。

あたたかなユーモアあふれる作品や、豊かな自然の恵みを描いた作品に、絵本本来の力を感じることができる。何をどう選びどのように紹介するか選書眼が問われることになる。

また、難民の立場に追いやられたり、マイノリティとして差別を受けたり、世界にはさまざまな生き難さを強いられている人々がいることを知らせる絵本も、人権意識と絡めて出版された。特に、既成概念を覆し自ら権利を勝ち取ってきた女性の伝記絵本が目立った年でもあった。

一人一人が未来のために心を砕いていくために、他者を含めた環境理解に敏感な感性を絵本の助けを借りて育てられますように。

- ◆ なんだろ、なにかな？〈感性を刺激する〉想像してみる
- ◆ 自然と遊ぶ〈感性を刺激する〉ひろがる心
- ◆ つながる喜び〈感性を刺激する〉広がるせかい
- ◆ 明日への希望をそだてる〈だいじょうぶ！ 不安や願いがあるから成長〉
- ◆ 声のリズム言葉のリズムを楽しもう！〈感性を刺激する〉詩ごころいっぱい
- ◆ 広がるせかい〈心にしみこむ絵とおはなしたち〉夢と不思議
- ◆ 広がるせかい〈心にしみこむ絵とおはなしたち〉芸術を愛する心
- ◆ 広がるせかい〈心にしみこむ絵とおはなしたち〉昔話や伝統
- ◆ 食を支える〈ちきゅうに生きる〉自然の恵み
- ◆ 仲間がいっぱい〈ちきゅうに生きる〉地球の命
- ◆ 立ち位置を知る〈ちきゅうに生きる〉生きる指針を考える
- ◆ 言葉は違っても〈ちきゅうに生きる〉つながる喜び
- ◆ 違いを尊重〈ちきゅうに生きる、異文化・共生〉多様な価値観を育てる
- ◆ 過去とつながり〈ちきゅうに生きる、歴史〉未来を考える
- ◆ 自分らしさ〈ちきゅうに生きる〉個性を伸ばす
- ◆ 自分らしく生きるっていいな〈ちきゅうに生きる〉尊厳を取り戻す
- ◆ 自分らしく生きるっていいな〈ちきゅうに生きる〉困難を乗り越えて

* 上記17のカテゴリ分けは読む視点によって変わり、どの絵本も本来複数のカテゴリに重複するものであることをお断りしておきます。

■なんだろ、なにかな？〈感性を刺激する〉想像してみる

	幼	『まんまるだあれ』/いもり みつひこ・文・切り絵/アリス館/2018. 4/¥1300/(絵本)
	幼	『のりものなあにかな たのしいあてっこえほん』/かきもと こうぞう・絵, はせがわ さとみ・文/学研プラス/2018. 11/¥900/(絵本)
★	幼	『タイヤタイヤだれのタイヤ』/そく ちよるうおん・作/アリス館/2018. 8/¥950/(絵本)

■自然と遊ぶ〈感性を刺激する〉ひろがる心

	幼	『あかんぼっかん』/ザ・キャビンカンパニー・作/借成社/2018. 5/¥1500/(絵本)
★	幼	『あのくもなあに？』(幼児絵本ふしぎなたねシリーズ)/富安 陽子・ぶん, 山村 浩二・え/福音館書店/2018. 5/¥900/(絵本)
	幼	『ショベルくんとあおいはな』/ヨーゼフ・クフラー・さく, 石津 ちひろ・やく/学研プラス/2018. 9/¥1600/(絵本)
★	幼	『すなのたね』(講談社の翻訳絵本)/シビル・ドラクロワ・作, 石津 ちひろ・訳/講談社/2018. 7/¥1500/(絵本)
★	幼	『どしゃぶり』(講談社の創作絵本)/おーなり 由子・ぶん, はた こうしろう・え/講談社/2018. 6/¥1400/(絵本)
	小低	『ライオンの風をみたいちにち』/あべ 弘士・著/佼成出版社/2018. 9/¥1300/(絵本)
★	小中	『風のぼうけん』(曹文軒絵本シリーズ)/曹 文軒・文, アレクサンダル・ゾロティッチ・絵, いわやきこ・訳/樹立社/2018. 10/¥1500/(絵本)
★	小中	『さとやまさん』/工藤 直子・文, 今森 光彦・写真/アリス館/2018. 4/¥1500/(絵本)

■つながる喜び〈感性を刺激する〉広がるせかい

	幼	『あいさつってたのしい』(ぴっかぴかえほん)/石津 ちひろ・文, 松田 奈那子・絵/小学館/2018. 3/¥1300/(絵本)
	幼	『きょう、おともだちができたの』(童心社のおはなしえほん)/得田 之久・作, 種村 有希子・絵/童心社/2018. 2/¥1300/(絵本)
	幼	『うずらかあさんとたまご』/島野 雫・さく・え/教育画劇/2018. 9/¥1300/(絵本)
★	幼	『ママー、ポケット!』/デヴィッド・エズラ・シュタイン・作, ふしみ みさを・訳/光村教育図書/2018. 11/¥1200/(絵本)
★	幼	『チトくんとにぎやかないちば』/アティヌーケ・文, アンジェラ・ブルックスバンク・絵, さくま ゆみこ・訳/徳間書店/2018. 3/¥1600/(絵本)
	小低	『スタンリーとちいさな火星』/サイモン・ジェームズ・作, 千葉 茂樹・訳/あすなろ書房/2018. 8/¥1400/(絵本)
★	小低	『でんしゃにのるよひとりでのるよ』/村せ ひでのぶ・さく, 宮澤 ナツ・え/交通新聞社/2018. 3/¥1300/(絵本)

★	小中	『ずっと ねがいはひとつだけ』/ケイト・クライス・文, M. サラ・クライス・絵, なががわ ちひろ・訳/WAVE出版/2018. 5/¥1400/(絵本)
---	----	--------------------------------------------------------------------------------

■明日への希望をそだてる(だいじょうぶ！不安や願いがあるから成長)

	幼	『つちをほらなくなったスチームショベル』/ジョージ・ウォルターズ・文, ロジャー・デュボアザン・絵, こみや ゆう・訳/好学社/2018. 12/¥1500/(絵本)
	幼	『ちいさいサンパン』/小春 久一郎・文, 山本 忠敬・絵/出版ワークス/2018. 8/¥1600/(絵本)
	小低	『ソフィーとちいさなおともだち』/パット・ジトロー・ミラー・文, アン・ウィルズドルフ・絵, 二宮 由紀子・訳/光村教育図書/2018. 8/¥1400/(絵本)
★	小低	『おやすみなさいトマトちゃん』/エリーザ・マッツォーリ・文, クリステイーナ・ペティ・絵, ほし あや・訳/きじとら出版/2018. 7/¥1400/(絵本)
	小低	『おたんじょうびの2つのたまご』/ジェニファー・K. マン・作, 石井 睦美・訳/光村教育図書/2018. 9/¥1400/(絵本)
	小中	『ムカッやきもちやいた』/かさい まり・さく, 小泉 るみ子・え/くもん出版/2018. 10/¥1400/(絵本)
★	小中	『ぼくのなまえはへいたろう』(ランドセルブックス)/灰島 かり・文, 殿内 真帆・絵/福音館書店/2018. 6/¥1200/(絵本)
	小低	『わたしのもりをぬけたら』/レイチェル・ウッドワース・さく, サン・ミャオ・え, 華恵・やく/フレーベル館/2018. 10/¥1400/(絵本)
	小低	『くろいの』/田中 清代・さく/偕成社/2018. 10/¥1400/(絵本)
	小中	『ひだまり』/林 木林・文, 岡田 千晶・絵/光村教育図書/2018. 11/¥1300/(絵本)

■声のリズム言葉のリズムを楽しもう！(感性を刺激する)詩ごころいっぱい。

	小中	『漢字はうたう』/杉本 深由起・詩, 吉田 尚令・絵/あかね書房/2018. 5/¥1300/(絵本)
	小中	『ワイズ・ブラウンの詩の絵本 新装版』/マーガレット・ワイズ・ブラウン・詩, レナード・ワイスガード・絵, 木坂 涼・訳/フレーベル館/2018. 3/¥1400/(絵本)
	小中	『はるなつあきふゆの詩』/ジュリー・フォリアーノ・詩, ジュリー・モースタッド・絵, 石津 ちひろ・訳/偕成社/2018. 6/¥1800/(絵本)
	小低	『セリョージャとあそぼう！ ロシアのこどものあそびとうたと』/ナディア・コズリナ・絵・デザイン, ナディア・コズリナほか・文・訳/カランダーシ/2018. 11/¥1,400/(絵本)

■広がるせいかい(心にしみこむ絵とおはなしたち)夢と不思議

	幼	『このねこ、うちのねこ！』/ヴァージニア・カール・作・絵, こだま ともこ・訳/徳間書店/2018. 4/¥1500/(絵本)
	幼	『ねこはまいにちいそがしい』/ジョー・ウィリアムソン・作・絵, いちだ いづみ・訳/徳間書店/2018. 8/¥1600/(絵本)

	幼	『とってもなまえのおおいネコ』(評論社の児童図書館・絵本の部屋)/ケイティ・ハーネット・作, 松川 真弓・やく/評論社/2018. 4/¥1400/(絵本)
	幼	『めぐる森の物語』/いまい あやの・作/BL出版/2018. 10/¥1500/(絵本)
★	幼	『ねこはちときんとつと』/寺島 ゆか・作/文溪堂/2018. 10/¥1500/(絵本)
	幼	『うみべのこねこ』/宇野 克彦・作, 西川 おさむ・絵/ひさかたチャイルド/2018. 1/¥1300/(絵本)
	小低	『おおかみのおなかのなかで』/マック・バーネット・文, ジョン・クラッセン・絵, なかがわ ちひろ・訳/徳間書店/2018. 12/¥1700/(絵本)
★	小低	『カタカタカタ おばあちゃんのたからもの』/リン シャオペイ・さく, 宝迫 典子・やく/ほるぷ出版/2018. 8/¥1600/(絵本)
★	小低	『おどりたいの』/豊福 まきこ・作/BL出版/2018. 9/¥1300/(絵本)
	小中	『せん』/スージー・リー・作/岩波書店/2018. 10/¥1800/(絵本)
	小低	『すいかのプール』/アンニョン・タル・作, 斎藤 真理子・訳/岩波書店/2018. 7/¥1700/(絵本)
★	小低	『ツリーハウスがほしいなら』/カーター・ヒギンズ・文, エミリー・ヒューズ・絵, 千葉 茂樹・訳/ブロンズ新社/2018. 4/¥1400/(絵本)
	小低	『あめだま』/ペク ヒナ・作, 長谷川 義史・訳/ブロンズ新社/2018. 8/¥1500/(絵本)
★	小低	『フランクリンの空とぶ本やさん』/ジェン・キャンベル・ぶん, ケイティ・ハーネット・え, 横山 和江・やく/BL出版/2018. 2/¥1600/(絵本)
★	小低	『ふくろうのオカリナ』/蜂飼 耳・文, 竹上 妙・絵/理論社/2018. 6/¥1500/(絵本)
	小中	『ぼくのたび』/みやこし あきこ・作/ブロンズ新社/2018. 11/¥1500/(絵本)
	小中	『オレゴンの旅』/ラスカル・文, ルイ・ジョス・絵, 山田 兼士・訳/らんか社/2018. 10(1995年刊の再刊)/¥1500/(絵本)
	小中	『大雪』/ゼリーナ・ヘンツ・文, アロイス・カリジェ・絵, 生野 幸吉・訳/岩波書店/2018. 11(1965年刊の改版)/¥1800/(絵本)
	小中	『ウルスリのすず』/ゼリーナ・ヘンツ・文, アロイス・カリジェ・絵, 大塚 勇三・訳/岩波書店/2018. 11(1973年刊の改版)/¥2000/(絵本)
	幼	『うさぎたちとふしぎなこうじょう』/アダム・グリーン・さく, レナード・ワイスガード・え, こみや ゆう・やく/好学社/2018. 9/¥1600/(絵本)
	小中	『オーロラの国の子どもたち』(世界傑作絵本シリーズ)/イングリ・ドーレアほか・さく, かみじょう ゆみこ・やく/福音館書店/2018. 11/¥1500/(絵本)
	小低	『たいこたたきの少年』/バーナデット・ワッツ・文と絵, 松永 美穂・訳/西村書店/2018. 12/¥1500/(絵本)

■広がるせかい(心にしみこむ絵とおはなしたち)芸術を愛する心

	小中	『ピエールくんは黒がすき!』/ミシェル・パストウロー・文, ローランス・ル・ショー・絵, 松村 恵理・訳/白水社/2018. 6/¥1800/(絵本)
--	----	-----------------------------------------------------------------------------

	小中	『ねずみのマウリッツ』/イングリット・シューベルトほか・作, 野坂 悦子・訳/文化学園文化出版局/2018. 12/¥1500/(絵本)
	小高	『ダム この美しいすべてのものたちへ』(児童図書館・絵本の部屋)/デイヴィッド・アーモンド・文, レーヴィ・ピンフォールド・絵, 久山 太市・訳/評論社/2018. 12/¥1500/(絵本)
	小高	『もしぼくが本だったら』/ジョゼ・ジョルジェ・レトリア・ぶん, アンドレ・レトリア・え, 宇野 和美・やく/KTC中央出版/2018. 3/¥1800/(絵本)
★	小高	『シルクロードのあかい空』/イザベル・シムレール・文・絵, 石津 ちひろ・訳/岩波書店/2018. 6/¥1800/(絵本)
★	中学	『フェデリコ・ガルシア・ロルカ子どもの心をもった詩人』/イアン・ギブソン・文, ハビエル・サバラ・絵, 平井 うらら・訳/影書房/2018. 6/¥2200/(961)

■広がるせいかいく心にしみこむ絵とおはなしたち)昔話や伝統

	小低	『お正月』(桂文我のでっち絵本)/桂 文我・ぶん, 国松 エリカ・え/BL出版/2018. 12/¥1300/(絵本)
★	小低	『ためぎの花よめ道中』(えほんのぼうけん)/最上 一平・作, 町田 尚子・絵/岩崎書店/2018. 3/¥1600/(絵本)
	小中	『鹿踊りのはじまり』(ミキハウスの絵本)/宮沢 賢治・作, ミロコマチコ・絵/三起商行/2018. 10/¥1500/(絵本)
★	小中	『徂徠どうふ』(日本傑作絵本シリーズ)/宝井 琴調・文, ささめや ゆき・絵/福音館書店/2018. 11/¥1100/(絵本)
	小中	『鬼のかいぎ 新・今昔物語絵本』/立松 和平・文, よしなが こうたく・絵/好学社/2018. 3(新樹社 2011年刊の一部修正)/¥1500/(絵本)
★	小低	『なんげえはなしっこしかへがな』/北 彰介・文, 太田 大八・絵/BL出版/2018. 11(銀河社 1979年刊の再刊)/¥1500/(絵本)
	小中	『ほうまんの池のカッパ』/椋 鳩十・文, 赤羽 末吉・絵/BL出版/2018. 2(銀河社 1975年刊の再刊)/¥1400/(絵本)
	小中	『黄金りゅうと天女』/代田 昇・文, 赤羽 末吉・絵/BL出版/2018. 3(銀河社 1974年刊の再刊)/¥1400/(絵本)
★	小中	『クマと少年』/あべ 弘士・作/ブロンズ新社/2018. 5/¥1500/(絵本)
	小中	『イオマンテ めぐるいのちの贈り物』(北の大地の物語)/寮 美千子・文, 小林 敏也・画/ロクリン社/2018. 2(パロル舎 2005年刊を一部加筆修正し新装)/¥2000/(絵本)
	小低	『巨人の花よめ スウェーデン・サーメのむかしばなし』/菱木 晃子・文, 平澤 朋子・絵/BL出版/2018. 1/¥1600/(絵本)
	小低	『金の鳥 ブルガリアのむかしばなし』/八百板 洋子・文, さかた きよこ・絵/BL出版/2018. 12/¥1600/(絵本)
★	小低	『七人のシメオン ロシアのむかしばなし』/田中 友子・文, 大畑 いくの・絵/BL出版/2018. 6/¥1600/(絵本)
	小低	『雪の花 ロシアのお話』/セルゲイ・コズロフ・原作, オリガ・ファジェーエヴァ・絵, 田中 友子・文/偕成社/2018. 11/¥1800/(絵本)
★	小低	『まめつぶこぞうパトゥフェ スペイン・カタルーニャのむかしばなし』/宇野 和美・文, ささめや ゆき・絵/BL出版/2018. 10/¥1600/(絵本)
	小低	『くらやみのゾウ ペルシャのふるい詩から』(評論社の児童図書館・絵本の部屋)/ルーミー・原作, ミナ・ジャバアービン・再話, ユージン・イエルチン・絵, 山口 文生・訳/評論社/2018. 1/¥1400/(絵本)

小低	『王さまになった羊飼 い チベットの昔話』(世界傑作絵本シリーズ)/松瀬 七織・再話, イ ヨンギョン・絵/福音館書店/2018. 3/¥1600/(絵本)
----	--------------------------------------------------------------------------------

■食を支える(ちきゅうに生きる)自然の恵み

幼	『ぴちぱちさくさく』/若菜 ひとしほか・作/ひさかたチャイルド/2018. 8(チャイルド本社 2016年刊の改訂)/¥1000/(絵本)
小低	『やきいもやゴンラ』(ポプラ社の絵本)/ながい いくこ・作, くすはら 順子・絵/ポプラ社/2018. 9/¥1300/(絵本)
幼	『ごろりんたまねぎ』(どーんとやさい)/いわさ ゆうこ・さく/童心社/2018. 7/¥1100/(絵本)
小低	『あずき』(かがくのとも絵本)/荒井 真紀・さく/福音館書店/2018. 11/¥900/(絵本)
幼	『きりみ』/長嶋 祐成・え・ぶん/河出書房新社/2018. 7/¥1350/(絵本)
幼	『にぎやかなおでん』/犬飼 由美恵・文, 出口 かずみ・絵/教育画劇/2018. 11/¥1100/(絵本)
★	小低 『大根はエライ』(たくさんのふしぎ傑作集)/久住 昌之・文・絵/福音館書店/2018. 1/¥1300/(626. 44)
★	小低 『ぬかどこすけ!』/かとう まふみ・作/あかね書房/2018. 11/¥1300/(絵本)
小低	『ソフィーのくだものばたけ』/ゲルダ・ミュラー・作, ふしみ みさを・訳/BL出版/2018. 7/¥1700/(絵本)

■仲間がいっぱい(ちきゅうに生きる)地球の命

★	幼 『ぼくらはいけのカエル はじめてのいきもの』/まつおか たつひで・さく/ほるぷ出版/2018. 5/¥1250/(絵本)
幼	『ぼく、おたまじゃくし?』/田島 征三・作・絵/佼成出版社/2018. 6/¥1300/(絵本)
小低	『虫のしわざ探偵団』/新開 孝・写真・文/少年写真新聞社/2018. 5/¥1500/(486. 1)
小低	『ミジンコでございませう。』/佐藤 まどか・文, 山村 浩二・絵/フレーベル館/2018. 6/¥1300/(絵本)
小中	『ミツバチのはなし』/ヴォイチェフ・グライコフスキ・文, ピョトル・ソハ・絵, 武井 摩利・訳, 原野 健一・日本語版監修/徳間書店/2018. 7/¥2800/(486. 7)
小低	『サナギのひみつ』(ポプラサイエンスランド)/三輪 一雄・著, 大谷 剛・監修/ポプラ社/2018. 6/¥1500/(486. 1)
小中	『ムラサキダコ 海からあらわれるマントの怪人』(ふしぎびっくり写真えほん)/中村 宏治・写真・文, 奥谷 喬司・監修/フレーベル館/2018. 7/¥1400/(絵本)
★	小低 『もぐらはすごい』/アヤ井 アキコ・著, 川田 伸一郎・監修/アリス館/2018. 5/¥1500/(絵本)
小低	『巣箱のなかで』/鈴木 まもる・作・絵/あかね書房/2018. 7/¥1300/(絵本)

	小低	『はらぺこゾウのうんち』/藤原 幸一・写真・文/偕成社/2018. 11/¥1600/(絵本)
	小低	『ホッキョクグマ』/ジェニ・デズモンド・さく, 福本 由紀子・やく, 長瀬 健二郎・日本語版監修/BL出版/2018. 3/¥1600/(絵本)
★	小中	『ザトウクジラ』/ヨハンナ・ジョンストン・さく, レナード・ワイスガード・え, こみや ゆう・やく/好学社/2018. 6/¥1600/(絵本)
	小中	『動物たちは、冒険家！ 地球を旅する生きものの不思議』/キム・トマス・文, フリオ・アントニオ・ブラスコ・絵, 宇野 和美・訳/河出書房新社/2018. 1/¥1800/(絵本)
	小中	『動物たちは、建築家！ どんなお家に住んでるの？』/ダニエル・ナサル・文, フリオ・アントニオ・ブラスコ・絵, 古草 秀子・訳/河出書房新社/2018. 2/¥1800/(絵本)

■立ち位置を知る<ちきゅうに生きる>生きる指針を考える

	小中	『みずとはなんじゃ？』/かこ さとし・作, 鈴木 まもる・絵/小峰書店/2018. 11/¥1500/(絵本)
	小低	『石はなにからできている？』(ちしきのぽけっと)/西村 寿雄・文, 武田 晋一・写真/岩崎書店/2018. 9/¥1600/(458)
★	小中	『13800000000ねんきみのたび』(HERS BOOKS)/坂井 治・さく・え, 斎藤 俊介・イラスト原案, 倉持 利明・監修/光文社/2018. 4/¥1600/(絵本)
	小低	『うちゅうはきみのすぐそばに』/いわや けいすけ・ぶん, みねお みつ・え/福音館書店/2018. 1/¥1400/(絵本)
	小高	『アリになった数学者』(たくさんのふしぎ傑作集)/森田 真生・文, 脇阪 克二・絵/福音館書店/2018. 10/¥1300/(410)

■言葉は違っても<ちきゅうに生きる>つながる喜び

	小低	『英語でもよめるじぶんだけのいろ』/レオ＝レオニ・作, 谷川 俊太郎・訳/好学社/2018. 5/¥1300/(絵本)
	小低	『ねずみのすもう 日本民話』(えいごのじかん)/わたなべ さもじろう・絵, ジェリー・マーティン・訳/鈴木出版/2018. 3/¥1800/(絵本)
	小低	『まめのかぞえうた』(えいごのじかん)/西内 ミナミ・さく, 和歌山 静子・え, ジェリー・マーティン・訳/鈴木出版/2018. 3/¥1800/(絵本)

■違いを尊重<ちきゅうに生きる、異文化・共生>多様な価値観を育てる

	小低	『ぼくの島によくこそ！』/市川 里美・作/BL出版/2018. 8/¥1400/(絵本)
	小低	『いっしょにおいでよ』/ホリー・M. マギー・文, パスカル・ルメートル・絵, なかがわ ちひろ・訳/廣済堂あかつき/2018. 4/¥1500/(絵本)
	小中	『わたしはヴァネッサと歩く クラスのいじめを止めさせた、たった一つの行動』/ケラスコエット・作・絵/岩崎書店/2018. 2/¥1400/(絵本)
★	小中	『私はどこで生きていけばいいの？』(世界に生きる子どもたち)/ローズマリー・マカーニー・文, 西田 佳子・訳/西村書店/2018. 6/¥1500/(絵本)

★	小中	『わたしたちだけのときは』/デイヴィッド・アレキサンダー・ロバートソン・文, ジュリー・フレット・絵, 横山 和江・訳/岩波書店/2018. 9/¥1400/(絵本)
★	小中	『わたしの島をさがして』/ジュノ・ディアス・作, レオ・エスピノサ・絵, 都甲 幸治・訳/汐文社/2018. 8/¥1800/(絵本)
	小中	『難民になったねこクンクージュ』/マイン・ヴェンチャーラ・文, ベディ・グオ・絵, ヤズミン・サイキア・監修, 中井 はるの・訳/かもがわ出版/2018. 8/¥1700/(絵本)
★	小高	『石たちの声がきこえる』/マーグリート・ルアーズ・作, ニザール・アリー・バドル・絵, 前田 君江・訳, ファラーフ・ラヒーム・アラビア語訳/新日本出版社/2018. 8/¥1500/(絵本)
	小中	『みんなたいせつ 世界人権宣言の絵本』/東 菜奈・構成・訳, 渋谷 敦志・写真/岩崎書店/2018. 11/¥1700/(絵本)
★	小中	『ふたりママの家で』/パトリシア・ポラッコ・絵・文, 中川 亜紀子・訳/サウザンブックス社/2018. 10/¥2300/(絵本)
	小高	『にじいろのしあわせ マーロン・ブンドのあるいちにち』/マーロン・ブンドほか・作, EGケラー・絵, 服部 理佳・訳/岩崎書店/2018. 12/¥1400/(絵本)

■過去とつながりくちゅうに生きる、歴史)未来を考える

	小低	『ぼくはアイスクリーム博士』/ピーター・シス・さく, たなか あきこ・やく/西村書店/2018. 5/¥1500/(絵本)
	小中	『せかいでさいしょのポテトチップス』/アン・ルノー・文, フェリシタ・サラ・絵, 千葉 茂樹・訳/BL出版/2018. 5/¥1500/(絵本)
	小中	『かあちゃんのジャガイモばたけ』(評論社の児童図書館・絵本の部屋)/アニタ・ローベル・さく, まつかわ まゆみ・やく/評論社/2018. 9/¥1400/(絵本)
	小高	『この計画はひみつです』/ジョナ・ウィンター・文, ジャネット・ウィンター・絵, さくま ゆみこ・訳/鈴木出版/2018. 6/¥1500/(絵本)
	小中	『ぼんやきゅう』(ポプラ社の絵本)/指田 和・文, 長谷川 義史・絵/ポプラ社/2018. 7/¥1300/(絵本)
	小高	『出発 から草もようが行く』/小泉 るみ子・作・絵/新日本出版社/2018. 6/¥1500/(絵本)
★	小高	『あのとき、そこにきみがいた。2016年4月熊本地震の現場から』(ポプラ社の絵本)/やじまますみ・作・絵/ポプラ社/2018. 3/¥1400/(絵本)
★	小高	『花ばあば』/クオン ユンドク・絵・文, 桑畑 優香・訳/ころから/2018. 4/¥1800/(210. 7)

■自分らしさくちゅうに生きる)個性を伸ばす

	小低	『キツネのはじめてのふゆ』/マリオン・デー・バウアー・作, リチャード・ジョーンズ・絵, 横山 和江・訳/鈴木出版/2018. 10/¥1500/(絵本)
★	小低	『きょうがはじまる』/ジュリー・モースタッド・作, 石津 ちひろ・訳/BL出版/2018. 8/¥1600/(絵本)
	小中	『えっ! わたしだけの学校?』/劉 旭恭・文・絵, 松本 猛・訳/新日本出版社/2018. 11/¥1500/(絵本)
★	小中	『やましたくんはしゃべらない』(こんな子きらいかな?)/山下 賢二・作, 中田 いくみ・絵/岩崎書店/2018. 11/¥1600/(絵本)

★	小中	『アヤンダ おおきくなりたくなかったおんなのこ』/ヴェロニク・タジョ・文, ベルトラン・デュボワ・絵, 村田 はるせ・訳/風涛社/2018. 4/¥1500/(絵本)
★	小低	『スムート かたやぶりなかげのおはなし』/ミシェル・クエヴァス・文, シドニー・スミス・絵, いわじょう よしひと・訳/BL出版/2018. 5/¥1700/(絵本)
	小中	『キース・ヘリング ぼくのアートはとまらない!』(評論社の児童図書館・絵本の部屋)/ケイ・A.ヘリング・文, ロバート・ニューベッカー・絵, 梁瀬 薫・訳, 中村キース・ヘリング美術館・監修協力/評論社/2018. 7/¥1600/(絵本)

■自分らしく生きるっていいな<ちきゅうに生きる>尊厳を取り戻す

	小中	『エマおばあちゃん、山をいく アパラチアン・トレイルひとりたび』/ジェニファー・サームズ・作, まつむら ゆりこ・訳/廣済堂あかつき/2018. 7/¥1800/(絵本)
★	小中	『炎をきりさく風になって ポストンマラソンをはじめて走った女性ランナー』/フランシス・ポレティイほか・作, スザンナ・チャップマン・絵, 渋谷 弘子・訳/汐文社/2018. 2/¥1800/(絵本)
	小高	『大統領を動かした女性ルース・ギンズバーク 男女差別とたたかう最高裁判事』/ジョナ・ウインター・著, ステイシー・イナースト・絵, 渋谷 弘子・訳/汐文社/2018. 3/¥1800/(絵本)
	小中	『あるけ!ねがいをこめて 子どもたちの権利のためにたたかった女性マザー・ジョーンズ』/モニカ・カリング・文, フェリシタ・サラ・絵, 西田 佳子・訳/フレーベル館/2018. 12/¥1600/(絵本)
	小高	『世界にひかりをともした13人の女の子の物語』/チェルシー・クリントン・作, アレグザンドラ・ボイガー・絵, 西田 佳子・訳/潮出版社/2018. 7/¥1700/(280)
	小高	『ショッキングピンク・ショック! 伝説のファッションデザイナー エルザ・スキヤパレリの物語』/キョウ・マクレア・文, ジュリー・モースタッド・絵, 八木 恭子・訳/フレーベル館/2018. 11/¥1600/(絵本)
★	小高	『ルイズ・ブルジョワ 糸とクモの彫刻家』/エイミー・ノヴェスキー・文, イザベル・アルスノー・絵, 河野 万里子・訳/西村書店/2018. 10/¥1800/(絵本)
	小高	『怪物があらわれた夜 『フランケンシュタイン』が生まれるまで』/リン・フルトン・文, フェリシタ・サラ・絵, さくま ゆみこ・訳/光村教育図書/2018. 12/¥1500/(絵本)

■自分らしく生きるっていいな<ちきゅうに生きる>困難を乗り越えて

	小中	『ぼく、アーサー』/井上 こみち・文, 堀川 理万子・絵/アリス館/2018. 10/¥1400/(絵本)
★	小中	『ゆうなとスティービー』(ポプラ社の絵本)/堀米 薫・さく, 丸山 ゆき・え/ポプラ社/2018. 10/¥1400/(絵本)
★	小高	『ローラとわたし』/キアラ・ヴァレンティーナ・セグレ・文, パオロ・ドメニコニ・絵, 杉本 あり・訳/徳間書店/2018. 1/¥1600/(絵本)
★	中学	『マルコとパパ ダウン症のあるむすことぼくのスケッチブック』/グスティ・作・絵, 宇野 和美・訳/偕成社/2018. 2/¥2800/(378. 6)

公益財団法人図書館振興財団
第19回 子どもの本 この1年を振り返って 2018年 講演録
■絵本の部■

講演：一般社団法人 日本子どもの本研究会 絵本研究部 米田 久美江

こんにちは。日本子どもの本研究会 絵本研究部の米田と申します。当研究会では長年、児童書の研究や読書推進運動を行っていますが、私はこの中の「絵本研究部」というグループに所属し、メンバーと一緒に絵本を読んだり、勉強したりしています。当研究部では「子どもの本棚」という月刊書評誌も刊行していますので、会場の中には、当グループについてご存知の方もいらっしゃるかと思います。

■感性を刺激する絵本たち

2018年は、温暖化など異常気象や、プラスチックによる海洋汚染といった、環境問題の深刻さが非常に際立ってきた年であるように思います。また、人権侵害や様々なハラスメントに対しての告発が、とても活発にもなりました。多様な生き方や少数者の方々の尊厳を大切に、人々がもっと住みやすく、生きやすい世の中となるよう、たくさんの声が上がった記念すべき年でもあるように思います。特に女性の権利や、今まで枠にはめられていた「女性」という性を、きちんと自分たちに取り戻すというような動きが活発で、出版界でも女性の生き方や人間の権利といったテーマの本が多く出版されました。これは特に、伝記絵本の分野で顕著だったのではないかと思います。

そして絵本自体もここ数年、とてもセンスのいい、感覚的に優れた質の高い作品がどんどん出版されるようになり、幅が広がってきたように思います。それ故にあまり質の良くない、あるいは少し妙だなというような作品も目立つようになり、絵本の質の格差も広がっているような気がします。だからこそ、1人1人がよい本を自分のものにしていくという選書眼を養い、同じ時間を使って読むのであれば、自身の身になるいい本を選びたいと思います。

■なんだろう、なにかな？〈感性を刺激する〉想像してみる

まず1冊目をご紹介します。『[タイヤタイヤだれのタイヤ](#)』。「なんだろう」「なにかな」と、小さな子が一生懸命見て楽しむ絵本です。これは、釜山生まれで東京在住の作家の方が描いた絵本ですが、本作で乗り物絵本は3作目でしょうか。まず、タイヤのみが描かれたページがあり、次のページで何の車であるか、その答えが分かるようになっています。眺めているだけで、「どんな車だろう」と想像力がすごく働く本ではないかと思います。例えば、10個以上もの大小のタイヤが描かれたページもありますが、その中には宙に浮いたタイヤまで描かれています。さて、その車の正体は…？車好きな子たちであれば、それが何であるかすぐに分かってしまいます。本当に子どもの記憶というか、潜在能力はすごいなと思います。個人的には、こんなに頭を使う絵本は、初めてではないかと思うくらいでした。

■自然と遊ぶ〈感性を刺激する〉ひろがる心

次は「自然と遊ぶ」というテーマで集めた本を紹介します。まずは、『[あのくもなあに？](#)』。こちらの作品は、福音館書店「ちいさながくのとも」が絵本になったものです。私自身、雲はいつ見ても飽きないのですが、これまでも雲の絵本はたくさん出版されていて、楽しまれている方もいらっしゃるかと思います。ただ、これまでの雲の絵本では「あの雲、シュークリームに

似てる」とか「羊に似てる」とか、食べ物や動物などに例えたりする作品が多く見られたように思いますが、本作では作者の富安さんの想像力と、世界的アニメーターの山村浩二さんによる絵とで、とてもすてきでファンタジックな雲の世界に創り上げられています。

続いて『すなのたね』。こちらはフランスの絵本です。モノクロの絵の中で唯一使われている黄色と青がすごく印象的な、夏の思い出を描いた作品です。小さな女の子とその弟が、海で楽しく過ごしてきますが、家に帰ってきて、その楽しさが終わってしまったことにながっかりしています。でもサンダルを脱いだら、中から砂がザザーッとこぼれます。お姉ちゃんはその砂を手のひらに受け、そうだ、種みたいにまいてみようと言います。そこから何が生まれてくるのか2人で様々な想像をめぐらしていく絵本です。楽しかった思い出を、さらに大きな想像に託し、子どもたちは次のステップに進んでいくのではないかと思います。

砂の絵本の次は、雨の絵本『どしゃぶり』。大きな雨粒が奏でる雨の音。考えうる限りの雨音が表現されているのではないかとはいくらくらい、この作品には様々な擬音が並んでいます。それを読んでいるだけでも楽しいのですが、絵を見ても「ぱっしゃーん！」と、思わずやりたくなります。飛び上がって、水の中に「ぶっしゃあん！」。これもやってみたいですね。見ている子どもたちもそうだと思いますが、大人もそんな思いにさせられるかもしれません。どしゃぶりの中、この大きな雨粒の中で、雨の感触を楽しむ絵本です。

『風のぼうけん』は中国からの翻訳絵本です。中国の児童文学界の第一人者である曹文軒さんが文を書き、セルビア出身の画家が絵をつけた作品。2人で様々なやり取りをし、相談しながら絵をつけたらしいのですが、皆が頭の中で思い描くような中国らしい風景が描かれていて、そこがまた外国の絵本らしくていいのではないかと思います。風が自分の力を知って、行く先々でいろいろなことを試してみます。しかし、やり過ぎて大変なことに…。風の力を擬人化した絵本です。

続いて『さとやまさん』。こちらは、工藤直子さんの詩と今森光彦さんの写真による絵本です。里山は、田舎暮らしであれば非常に身近なものです。都会育ちだとそうはいきませんよね。そういう里山の、いろんな形のいろんな命を写真と言葉で綴っています。春は「かぜ ふうわり」、夏は「かぜ さっさっさ」といった表現で、季節の移り変わりは風が運ぶのだということを伝えています。

■つながる喜び〈感性を刺激する〉広がるせかい

つながる喜びを表した『ママー、ポケット!』。いつもママのおなかの袋に入っているカンガルーの赤ちゃんが、「ママ、おそとをピョンピョンしたいよ」と飛び出し、外の世界に向かっていきます。最初は1歩、でも外は初めてなので、出会うもの出会うもの全てに「きみ、だあれ?」。新しい仲間に出会ってびっくりして、またママのポケットへ逆戻り。ポケットに入ると安心するけど、すぐまた外に出て2歩、3歩。だんだん歩数を伸ばし、いろんな世界を知っていきます。そして最後5歩目に出会ったのは…。とてもほんわかしていて、一見赤ちゃん向けの作品ではありますが、5～6歳の子どもたちもすごく楽しんで見てくれました。

次は『チトくんとにぎやかないちば』。表紙に描かれたお母さんのスカートの柄に注目していると、ページを開いた見返しも、そのスカートの柄になっています。すてきな絵本です。こちら

は西アフリカの市場をよく知っている、ナイジェリア生まれの作家と、西アフリカ育ちの画家さんが競作した絵本です。ある日、チトくんはおかあさんといちばにやってきました。いちばはとてもにぎやかで、チトくんはキョロキョロ。あんまりチトくんがかわいいので、いちばのみんなが色々なものをくれます。おかあさんは、もらったものを頭のかごに入れていきますが、チトくんはそれを1個ずつ食べていきます。もらった食べ物数が1つ1つ減っていくというお話です。アフリカのにぎやかな、明るい市場の様子が丁寧に描かれていて、読者もチトくんと一緒に市場をキョロキョロしたくなるような、楽しい作品です。アフリカの市場ってこんな所なのかなと思いつつ読めるのではないかと思います。

『でんしゃにのるよひとりでのるよ』。こちらは、小学校2年生ぐらいの男の子でしょうか。初めて1人で電車に乗っておじいちゃんのうちに行くお話です。大喜びでおうちをスタートし、駅まで走っていく男の子。だけど、駅に着くとやっぱりちょっと不安です。不審なおじさんが少し離れたところに立っていたり(後に誰かが判明)、読んでいる子どもたちも「大丈夫なのかな」と一緒にハラハラしながら読める絵本です。

続いて『ずっとねがいはひとつだけ』。表紙の大きな犬は、主人公の女の子が生まれた時にすでに家にいて、2人は一緒に育ちました。女の子が生まれた時には「お兄ちゃん」のようだった犬ですが、女の子が6歳になる頃には「おじいちゃん」になり、一緒に過ごす時間が残り少ないことに、女の子は気づきます。そこで女の子は何とか楽しませてあげようと、犬をレストランや映画館など様々な所に連れて行ってあげます。自転車にまで乗せてあげたり、2人は色々な体験をするのですが、本当は犬は、静かにずっと一緒にいたいだけ。相手のことを思って、私たちは色々なことをしてあげたいと考えますが、さて、本人はどう思っているのでしょうか…。こんなことも併せて、子どもたちに考えてもらいたいと思います。

■明日への希望をそだてる〈だいじょうぶ！不安や願いがあるから成長〉

『おやすみなさいトマトちゃん』は、イタリアの絵本です。とてもセンスのいい、すてきなデザインの本です。アニータは、今日は少しご機嫌ななめ。トマトを食べないことでお母さんに叱られ、お部屋に行くように言われてしまいます。トマトをお部屋と一緒に持っていきますが、むしゃくしゃしながらも、抱っこしてゆらゆらしたり、毛布に入れてあやしたりと、まるで子どもに対するようにトマトに話しかけます。本を読んであげたり、テレビは見ちゃ駄目でしょと叱ってみたり。そんな体験をしているうち、何だかトマトにガブッと噛みつきたくなります…。叱られて部屋に行ったときから出ていくまで、モーリス・センダックの有名な『かいじゅうたちのいるところ』と似た設定ですが、その時間の中で、小さなものを愛おしむという体験を積むことでムカムカが収まったということが分かります。これだけのプロセスを踏まなければ、気持ちは収まらないんだということもよく伝わってきて、個人的に大好きな絵本です。

『ぼくのなまえはへいたろう』。「へいたろう」という少し古くさい上に、何かを想像してしまうような名前を付けられたと悩んでいる男の子。お友達に相談したり、名前について自身で色々なことを調べたりします。でも、お父さんやお母さんの話を聞いて、へいたろうくんは名前に込められた思いを知ります…。名前は付け替えることもできるけれど、人が抱く名前のイメージを自分自身で変えることもできるということを発見していくお話です。

■広がるせかい〈心にしみこむ絵とおはなしたち〉夢と不思議

『ねこはちときんとと』。「ねこはち」という名の猫と、「きんとと」という名の金魚。ねこはちは、きんととを見るのが大好き。でも、見られているきんととは、いつもビクビクしています。そんなある日、2匹の飼い主であるすみれが風邪をひいて寝込んでしまいます。きんととは心配して、お見舞いに行くことにしました。勢いよく金魚鉢を飛び出しますが、水の外では動けません。そんなきんととを、ねこはちがすみれの元に連れていってくれます…。突き抜けたユーモアが本当に楽しい絵本です。

次は『カタカタカタ』。これまで台湾の絵本が翻訳されたことは少なかったのではないのでしょうか。「カタカタカタ」とは、ミシンのこと。女の子にとって、ミシンはおばあちゃんの「すごいおもちゃ」です。おばあちゃんは、そのすごいおもちゃを使ってスカートやリュックなど様々なものを魔法のように作ってくれます。しかし、女の子が劇の発表会で使う衣装を作っている最中、おばあちゃんのミシンはどうとう壊れてしまいます。とても心配する女の子に、おばあちゃんが取った行動は…。すごいのはミシンではなく、実はおばあちゃんだったということが分かる絵本です。

『おどりたいの』。ある深い森の外れに美しい音楽の流れてくる建物があります。不思議に思ったうさぎの子が中をのぞいてみると、それはバレエ教室でした。あんまり美しいので、こうさぎは自分も踊りたくなり、教室に混ぜてもらって一緒に踊ります。この絵本は、どの場面も構図が素晴らしいです。こうさぎは一生懸命練習しますが、うさぎなので特にジャンプはお手のもの。こうさぎが躍るのを見て、他のこうさぎたちもバレエ教室に参加するようになります。ある日、こうさぎたちがダンス教室を訪れると、どうもいつもとは違う様子。発表会の準備です。こうさぎたちは発表会に出られずがっかりしますが、それを見ていたバレエ教室の女の子が、すてきなアイデアを出してくれます。構図が美しく、こういった絵本がもっとどんどん出てほしいなと思います。

『ツリーハウスがほしいなら』。子どもたちの夢の1つに、隠れ家が欲しい、自分たちだけの空間が欲しいということがあるのではないかと思います。例えば、押し入れの中や天井裏などがあるかと思いますが、その中にツリーハウスもあるのではないのでしょうか。この本では、ツリーハウスには「こんなものがあるよ」「あんなことができるよ」と、美しくダイナミックな絵でいろんな提案をしてくれます。本をいっぱい並べた図書館もあれば、見晴台みたいな場所もあったり、大きな温室のようなツリーハウスまで…。楽しい想像の世界が広がる絵本です。

『フランクリンの空とぶ本やさん』は、本が大好き、でも人に本を読んであげるのはもっと好きなドラゴンのお話。ドラゴンのフランクリンはいつも、町へ行って誰かに本を読んであげたいと思っていますが、人々は怖がって隠れたり逃げ出したりしてしまいます。でもそんな中、ドラゴンの本を夢中になって読んでいた女の子ルナと出会いました。2人はすぐに仲良くなり、町の人たちに本を読んでもらおうと、フランクリンの背中に本屋さんを作ることにしました。ルナの話に、最初は怖がっていた町の人たちも心を開きはじめます…。この物語、次のシリーズに続きますが、今度は2人で月まで行くようですよ。

『ふくろうのオカリナ』。広い野原に、ふくろうが駅員をつとめる夜の駅があります。ある晩、電車は終わっている時間なのに電車が到着し、ヒヨコが一羽降りてきます。ヒヨコは朝をさがし

にきたらしいのですが、自分でもどこから来たのかが分からず「迷子なの？」と言われて悲しくなり泣き始めます。困ったふくろうは、オカリナを吹いてヒヨコを慰めます…。不思議な力を持ったオカリナの音と月のウサギとの遠い昔の約束、朝になって母鳥がさがしにくるところなど、幻想的な雰囲気に、おかしなユーモアが混ざる作品世界が、絵でもダイナミックに表現されています。

■広がるせかい〈心にしみこむ絵とおはなしたち〉芸術を愛する心

芸術を愛する心を育ててほしいという思いで選んだ『シルクロードのあかい空』。夕日に映える山々の赤が鮮やかで、全体的に色彩がとても印象的な作品です。中国の西安からずっと西を目指してシルクロードを旅しながら、古代に思いを馳せつつ、畑や山々、石窟など、通り過ぎてゆく風景を描いています。美しい風景と、それぞれの土地の当時の姿やそこで暮らす生き物、人々の生活などの様々なエピソードとがページ交互に配され、スクラッチのような技法が効いた芸術的な絵を見ているだけでも幸せな気分になります。様々なものが描かれているので、色々な人の興味に突き刺さる絵本ではないかと思えます。

次は『フェデリコ・ガルシア・ロルカ子どもの心をもった詩人』。スペインを代表する詩人の伝記絵本です。美しい馬の絵などが描かれ、まるでスペインの洞窟壁画が思い起こされるような雰囲気を持った本です。ロルカの子どもの時代から、独裁者によって命を落とすまでの生涯が詩的な文章と絵で綴られています。詳しいことは巻末の解説にも書かれていて、そちらを読むだけでも歴史の勉強にもなります。芸術性の高い絵本ではないかと思えます。

■広がるせかい〈心にしみこむ絵とおはなしたち〉昔話や伝統

続いて、昔話などのお話を集めました。まず1冊目は『たぬきの花よめ道中』。こちらは最上一平さんのユーモアが効いたお話。タヌキにとっては、自分たちが住んでいる山の中が「都会」で、人間の住んでいる都会は「へき地」です。ところが、山にすむタヌキが都会のためき村へお嫁入りすることになり、タヌキたちは人間に化けて出かけてゆきます。人が多くてひっきりなしに車が走る都会は、タヌキたちから見れば「ふべんなところ」。タヌキの視点を通して、「人間世界」が何となく皮肉っぽいユーモアも交えて描かれ、楽しく読める絵本です。

2冊目は『徂徠どうふ』という、講談を元にしたお話です。江戸時代、芝の増上寺の近くに「かずさ屋七兵衛」という、はたらきものとうふ屋がいました。七兵衛は素豆腐を振り売りしていますが、毎日1丁だけ買っておしょうゆも掛けずに、その場で食べてしまうお侍さんがいました。いつもお金は後払いで一向に払ってくれず、とうとうそのままいなくなってしまう。その何年か後、七兵衛さんは病に倒れてしまいますが、そこに現れたのは…。ささめやさんの独特の情感をたたえた絵がさりげなくあたたかみを伝え、人情噺に親しみを感じさせます。

今、BL出版が、以前銀河社から出版されていた絵本を次々と復刊してくれています。今回紹介するのは、『なんげえはなしっこしかへがな』という1979年に出版された絵本の再刊で、「果てなし話」を集めたものです。「果てなし話」とは、子どもたちに昔話を聞かせるおばあさんが、1つ終わったら次…と何度もお話をせがまれた時に使う手段。擬音など、同じ言葉を繰り返し使ったお話で、あまりにもずっと同じ言葉が続くので「もういい」と子どもたちを飽きさせてしまうのがねらいです。例えば、この本でも紹介されている「へび」というお話では、ながーいへびの体を表すために「ズルズルズル ズルズルズル……」という言葉が延々と続きます。

いつまでたっても終わらないので、ちょうど寝る前の最後の1冊や、お話会であれば、あまりの長さに子どもたちが面白がった時点で、次の本に進むといった形で使うこともできます。また、語りでも結構ウケるので、そんな時にもこの中のお話の1つを使うとよいのではないのでしょうか。

『クマと少年』はアイヌ神話を基にした、あべ弘士さんの40年越しの構想の力作です（帯より）。北海道育ちのあべさんは、子どものときからアイヌに飼われている小熊を見て育ったそうです。アイヌのしきたりで、大人になった熊は「イオマンテ」のクマとなり、神の国へ帰すための儀式が行われます。おっばいを分け合って兄弟のように育った少年と小熊。小熊が大きくなり、とうとう「イオマンテ」に使われることになった時に、熊は檻から逃げ出します。命を考えると、こういうことかと考えさせられる物語です。

次は『七人のシメオン』です。姿形そっくりで、おまけにみんな「シメオン」という名の7人兄弟。ある日、兄弟が野良仕事をしていると王様が通りかかり、彼らは何者かを尋ねます。7人の兄弟はそれぞれ様々な特技を持っています。末っ子の特技は笛を吹くこと。司令官は王様に、笛を吹くことなど役に立たないから、末っ子を国から追い出してしまおうと耳打ちしますが、役に立たないと思われたシメオンの笛を聴くとみんな踊り出してしまいます。さて、そんなシメオンたちは、ある日、王様に遥か彼方の島にいる姫をたずねるよう命じられます。物語の最後、みんなが笛で踊る姿が描かれていたり、何とも楽しいお話です。ロシアの泰然とした雰囲気を感じられる作品です。

『まめつぶこぞうパトゥフェ』。スペインはカタルーニャ地方の昔話を、宇野和美さんによる再話で描かれた絵本です。「まめつぶ小僧」だから、親指小僧よりも一寸法師よりも小さい男の子ですね。ある日、このまめつぶ小僧がおつかいに行くことになります。しかし、とても小さくて金貨の陰に隠れてしまうほど。買い物をして荷物も運ぶことすら大変ですが、人々に踏みつぶされないよう、陽気に歌を歌いながら歩いていきます。キャベツの葉っぱに紛れたり、牛に飲み込まれてしまったりと、トラブルにも見舞われますが、最後は意外な方法で助かります。それは皆さんのご想像にお任せしますが、こちらもとても楽しい昔話です。

■食を支える〈ちきゅうに生きる〉自然の恵み

続いて、「食を支える 自然の恵み」というテーマで選んだ作品を紹介します。まずは、『大根はエライ』。大根は、地味な野菜だということを「これでもか、これでもか」と楽しく紹介しています。でも、実は大根って本当に色々な場で活躍している縁の下の力持ちなんです。でも、大根に「もっと威張ったら？」と言っても、やっぱり大根自身は「そんなやめてよ」と控えめに言うのかもしれない。

『ぬかどこすけ!』。お店でずっと売れ残っていたかめ（甕）。ある日、おばあさんに買われて、ようやく自分も活躍できると喜びます。しかし突然、何だかぐちゃぐちゃした臭いものを詰め込まれ、おまけに野菜まで入れられてがっかり。でも、まるでお風呂のように「ぐちゃぐちゃ」の中にくつろぐ野菜たち。「ぐちゃぐちゃ」の正体は「ぬかどこ姉さん」でした。ぬかどこ姉さんとの会話の中で、ぬかこのすごさを知っていくかめ。ユーモラスで「ばば臭く」ならず読める（笑）、ぬかづけの絵本です。

■仲間がいっぱい〈ちきゅうに生きる〉地球の命

『ぼくらはいけのカエル』は、まつおかたつひでさんが、家の近所の池をモデルに描かれた絵本です。モリアオガエルが、いろんな仲間のカエルを紹介してくれます。小さい子でも親しめるように絵も言葉も考えられ、楽しく作られている作品です。ザブ〜ン、スイスイスイ、カエルたちが気持ちよさそうに泳ぎ、鳴き声もさまざまなようすがリズムよく伝わってきます。虫を捕まえるときに飛び出すながーい舌にはびっくりです。

『もぐらはすごい』は文字通り、もぐらのすごさを描いた絵本です。本当に身近で、都会にも結構いるのではないかと思われるもぐらですが、実際に私たちがもぐらを目にする機会はほとんどありません。この作品では、もぐらが地面の下でどんな暮らしをしているかを詳しく紹介しています。年に一度、春に赤ちゃんが生まれますが、もぐらの赤ちゃんは大きくなると、巣を探すために巣から出ていきます。その時が一生に一度、地面の上に出る時であるそうです。鳥にさらわれそうになったり危険な目に遭いながらも、次の巣を探して独り立ちしていくという、生きることの厳しさも伝えている絵本です。

『ザトウクジラ』。こちらは、1965年にアメリカの出版社ダブルデイから出版された絵本ですが、2018年になって、ようやくその翻訳本が出版されました。レナード・ワイスガードの落ち着いた絵がとても迫力があり、シロナガスクジラの半分ぐらいの大きさのザトウクジラの生態が、詳しく語られています。当時は環境問題がまださほど大きな問題として捉えられていない時代ですね。そんな背景もあり、本当におおらかにクジラの様子を描いています。環境問題についての絵本、またはノンフィクションの本などを紹介する際、こんなおおらかな自然を守らなければいけないということを伝える意味でも、この本を紹介するとよいのではないかと思います。自分の立ち位置を知り、生きる指針を考える絵本です。

■立ち位置を知る〈ちきゅうに生きる〉生きる指針を考える

『13800000000ねんきみのたび』では、地球の歴史―誕生から現在に至るまでの進化の過程を描いています。「きみが うみをみると うきうきするのは、むかし、きみが うみのなかで いきものになったからかもしれない」とか、「きみが へんしんロボットを すきなのは、むかし、きみが さかなに へんしんしたからかもしれない」など、子どもの興味や関心にすぐく近い言葉で例えを挙げて、地球の歴史に興味を持てるよう紹介している絵本です。実際に小さなお子さんを持つお母さんが、「幼稚園くらいの子でも興味持って読んでくれた」とおっしゃっていました。同じ表現を繰り返し使い、読者に語りかけながら地球の歴史を描いた、素晴らしい作品であると思います。

■違いを尊重〈ちきゅうに生きる、異文化・共生〉多様な価値観を育てる

戦争や紛争のために、大変多くの子どもたちが難民とならざるを得ない状況に陥っています。『私はどこで生きていけばいいの?』は、そんな子どもたちを写し出した写真絵本です。本当に胸を打たれる写真ばかりで、子どもたちの厳しい状況が鮮明に伝わってきます。難民について取り扱ったフィクション、ノンフィクションの本は多く出版されていますので、ブックトークなどで、そういった本と一緒に紹介できる作品ではないかと思います。

『わたしたちだけのときは』。こちらはカナダの絵本です。なぜ、きれいな色の服を着て、髪を長くしているの?と、孫娘に尋ねられたおばあちゃん。おばあちゃんは、静かにその理由を語

り出します。昔、アメリカがインディアンに対して行ったのと同じように、カナダでも先住民に対する同化政策が行われました。先住民の子どもたちは、親元から引き離され、寄宿学校に入れられ制服を着せられて、自分の言葉で話すことも禁じられました。そんな悲しい子ども時代を過ごしたおばあちゃん。その思いがあるからこそ、今は好きなお花をお洋服に飾るという言葉が沁みてきます。日本でも、アイヌの人々が同化政策を強いられた歴史があります。今につながる、しっかりと考えていかなければならない本だと思います。

続いて紹介するのは『わたしの島をさがして』。独裁者から逃れてきた人々や、様々な国からの移民の子どもたちが集まるアメリカの学校。ある日先生が子どもたちに、生まれた国の絵を描いてくるようにと宿題を出します。でも、ロラは赤ちゃんの時にやってきたので、自分の国のことは全く覚えていません。そこで、一緒にアメリカへ渡って来た近所の人たちに、自分の島の様子を尋ねていきます。楽しい思い出をたくさん聞かせてもらいますが、その中には「怪物」についてのお話もありました…。なぜ、人々は怪物に追われてきたのか。その怪物とは何だったのか。こうしている今も私たちの世界で、怪物は生まれようとしているのかもしれない。

『石たちの声がきこえる』は、シリア難民について描いた絵本です。これは、作者のマーグリート・ルアーズが、Facebookに載せられたニザール・アリー・バドルの作品を見つけたことがきっかけで、でき上がった作品。物語と共に、様々な人々の姿が1つ1つの石を組み合わせることで表現されています。石に命が吹きこまれた作品の数々は遠景で見ると、すごく悲哀を込めたシルエットとなり、ぜひ皆さんにもご覧いただきたい1冊です。

次は、『ふたりママの家で』。パトリシア・ポラッコによる独特のタッチで描かれた、表紙の家族がとても楽しそうな絵本。養子縁組ならではの家族構成です。小さな子どもたちが順番に2人のママの家にやって来て、彼女たちが楽しく子育てをしている様子が描かれています。近所の人たちと一緒にパーティをしたり、ハロウィーンするときにも近所を回ったりします。そんな中、1人だけ気難しそうなおばさんがちょっと嫌な目を向けています。こういう人の心も開き、みんなが楽しく、自分らしく生きるためにはどうしたらいいのかといったことも考えさせられます。10年ほど前にアメリカで、クラウドファンディングによって生まれた絵本です。その頃アメリカでは、同じようなテーマで様々な絵本が出されています。日本においても、本作品はクラウドファンディングの手を借りて出版されました。

■過去とつながり〈ちきゅうに生きる、歴史〉未来を考える

『あのとき、そこにきみがいた。』。熊本地震について描いた絵本です。この絵本の作者であるイラストレーターのやじまますみさんは、地震が起こる少し前に熊本に引っ越してきて、そこで被災されました。その時の避難所の様子を本当にリアルに描いた、とても貴重な本であると思います。避難所で中学生たちが黄色いリブを着て、みんなを励ましてくれたり、炊き出しを配ったりしてくれた姿にすごく励まされ、希望をもらったことが描かれています。

『花ばあば』。こちらもクラウドファンディングで実現した絵本です。「日・中・韓平和絵本」のシリーズ第1作目でありながら、日本での出版が危ぶまれていたところを、田島征三さんと浜田桂子さんが出版社を見つけ、かつクラウドファンディングでたくさんの人々の助けを借りて、ようやく昨年出版されたそうです。クォン・ユンドクさんの創作過程、例えば他の作家さんたちとも相談しながら本を作られている様子など、ドキュメンタリーとして収めたDVD（監督：ク

オン・ヒョ監督，2012年，制作：ザ・ビッグ・ピクチャーズ）も発売されています。平和学習に欠かせない絵本ではないかと思います。

■自分らしさ〈ちきゅうに生きる〉個性を伸ばす

『きょうがはじまる』。私たちは毎日この一瞬一瞬を、1つ1つ選び取りながら生きています。朝、起きたら何をする。まず、髪型はどうするなど、分かりやすい例えで、様々な行動や物事を自身が選択することによって、1歩ずつ前に進んで行っているのだということを、再認識させてくれるすてきな絵本です。日常の暮らしは、選ぶという行為の瞬間の積み重ねです。カナダのイラストレーターが描いた絵で、自分の選択を楽しんで大切にするように促しています。おはなし会でも少人数でしたら、選ぶ楽しみを一緒に味わえるのではないかと思います。

赤と白の縞のマフラーをして、少しすねた様な目つきでこちらを見ている表紙の男の子がとても印象的な『やましたくんはしゃべらない』。幼稚園から小学校の9年間、外では一言も口を利かなかった作者自身の体験を描いた絵本です。ある意味、すごく強い意志の持ち主ではないかと思えます。口は利かないけれど、いじけている訳ではなく、学校でも明るくユーモアたっぷりに回りの子たちと過ごしています。自分らしく生きるやましたくんに、励まされる絵本ではないかと思えます。

『アヤンダ』も、先程の『やましたくん〜』のように、とても強い意志を持った女の子のお話です。こちらは昔話を基にした物語で、アフリカが舞台となっています。あるとき戦争が始まり、アヤンダのお父さんは戦場に連れて行かれて、そのまま戻ってきませんでした。そんな世の中では大きくなりたくない、アヤンダは自ら成長することをやめてしまいます。周りの子たちはみんな大人になっていきますが、アヤンダは子どものまま。そんな中、お母さんやおばあちゃんが病気になったり亡くなったりして、アヤンダ自身が家を守らなければならなくなります。次へのステップに進むための準備期間は人それぞれ、その子らしさを大切にしたいものです。

続いて『スムート』。「スムート」という名の、大人しい男の子の「かげ（影）」の物語です。スムートは、男の子があまり笑わないし遊んだりもしないので、いつも退屈しています。だけどかげだって、黄色いカナリアの歌を歌ったり、赤い野花のダンスを踊ったり、楽しい夢を見るのです。そんなある日、スムートの体は、ふっと男の子の体から離れてしまいます。自由になったスムートは思いきり色々なことをして遊びますが、それを見ていた他のかげたちは「自分たちも」と、次々と自由に動き出します…。お洒落ですてきな絵本です。この物語の絵を描いているのは、シドニー・スミス。昨年『うみべのまちで』（BL出版，2017年7月刊）という大人好みの絵本が出版されましたが、その本でも絵を担当しています。

■自分らしく生きるっていいな〈ちきゅうに生きる〉尊厳を取り戻す

『炎をきりさく風になって』は、昨年出版された、女性の伝記絵本の代表として紹介します。半世紀前まで、女性はマラソンで走ることができませんでした。でも、ボビーは走ることが大好きで、男性になりすまし、マラソンを走ります。途中で女性であることがばれてしまいますが、人々は応援してくれて、ボビーは風のように完走します。でも、法的に女性がマラソンを走るように認められたのは、その10年後。こうやって1つ1つ、私たちが歩む道を切り開いてくれた女性の先輩方がたくさんいるということを、たくさんの方の伝記絵本が伝えてくれています。

『ルイーズ・ブルジョワ』。こちらは芸術家、ルイーズ・ブルジョワの生涯を綴った絵本です。ルイーズのお母さんは織物修復士で、家中に美しい織物がたくさんあったそうです。それを見て育ったルイーズは、糸と織物の世界に魅せられました。そこから、織ったり紡いだりする「クモ」というモチーフを見出します。東京・六本木ヒルズにもルイーズ・ブルジョワによる巨大なクモの彫刻があり、彫刻家として有名なブルジョワですが、布絵本なども制作していたそうです。こちら絵がとても綺麗で、すてきな絵本です。

■自分らしく生きるっていいな〈ちきゅうに生きる〉困難を乗り越えて

作者自身の体験を元に出来上がった絵本『ゆうなとスティービー』。スティーヴィー・ワンダーの「スティービー」ですね。ゆうな家で飼っていた牛の中に、1頭だけ目の見えない子牛が産まれてきました。子牛は一家の愛情を受けてすくすく育っていきませんが、やはり最後は肉牛として売られていきます。本作品では、ゆうなが子牛にきちんと別れを告げるまでの姿が描かれています。食卓に上る牛肉が出荷されるまでの一端を知ることによって、私たちは、食に生かされ命をいただいているのだという実感が持てるのではないのでしょうか。

次は『ローラとわたし』。こちらは、盲導犬からの視点で描かれた、少女との日々を綴った絵本です。物語の最初の方では、読者は少女が盲目であることに気づかないよう描かれています。読んでいくうちに、徐々にそのことが分かってきます。盲導犬と少女の友情が描かれた作品です。犬が少女に寄り添い、少しずつ行動範囲を広げていき、読手に「発見」を促すように構成された展開が心に響きます。

最後に紹介するのは、『マルコとパパ』。ダウン症の息子が産まれてきて、パニックになってしまったパパ。最初は受け入れることができずに悩んだこと、しかし、この子はこのままでいいのだということに気付いてからすごく楽しくなってきたことなど、イラストレーターであるグステイ自身によるおおらかなスケッチで描かれています。マルコと一緒に遊ぶ姿や、家族の姿などがたくさんイラストと共に綴られ、ダウン症であるかないかは関係なく、人間関係そのものについて気づかされるすてきな絵本です。

以上、皆さん、どうもありがとうございました。

(於：株式会社図書館流通センター 2019年3月13日・14日)
※本図書リストおよび講演録の無断転用・複製は固くお断りいたします。